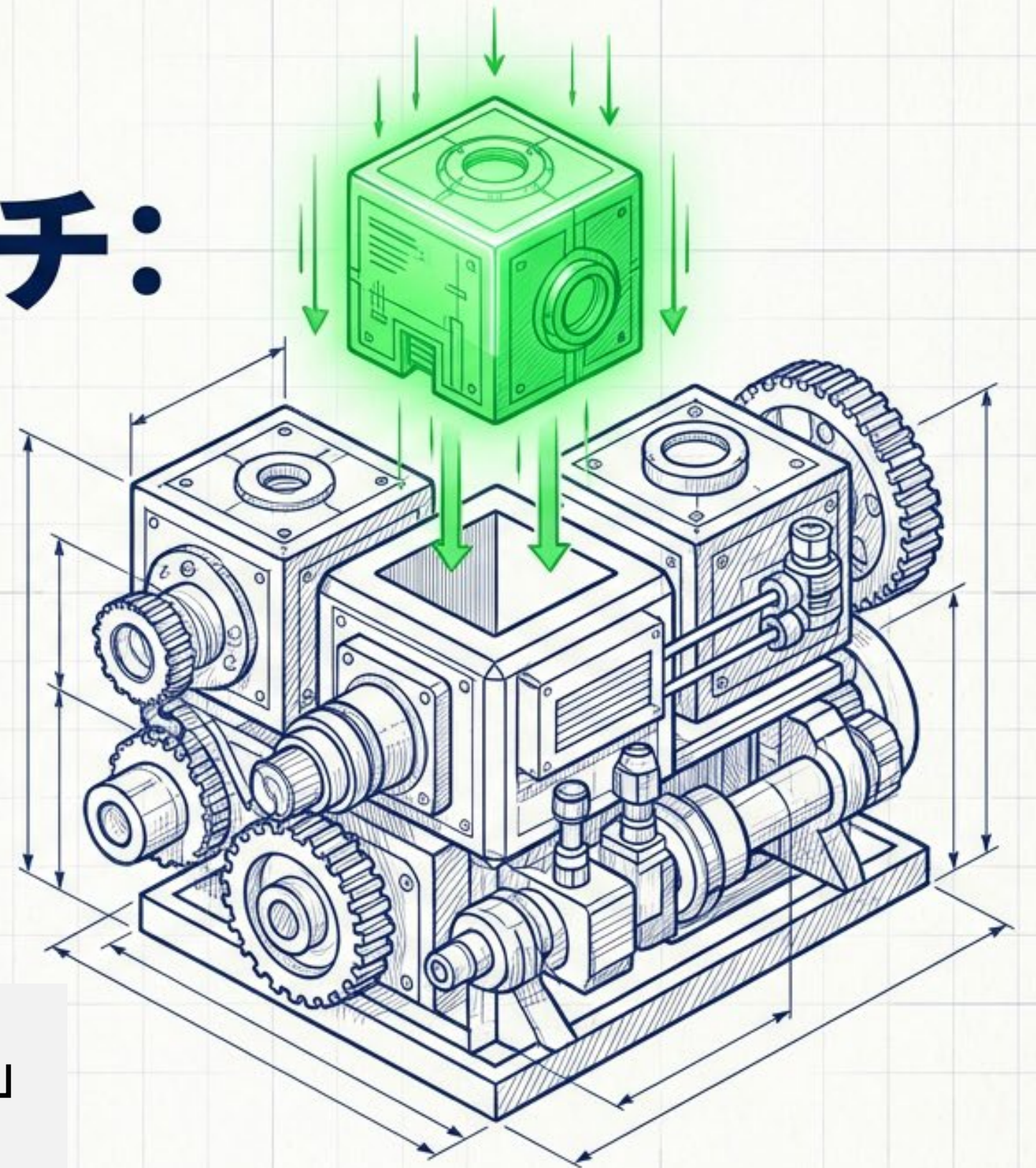


# 知財部を持たない企業の戦略的アプローチ： 知財機能の「外部 保管」という最適解

経営と技術を繋ぐ、  
企業知財部出身弁理士の活用法

2026年4月30日(第284回)知財実務オンライン：  
「知財部がない会社のための“企業知財部出身弁理士”の使い方」  
(ゲスト:日本弁理士会 特許委員会 副委員長(2025年度)  
/ 武田弁理士事務所 弁理士 武田 雄人)



# 知財なき企業が陥る「4つのブラックボックス」

## 方針の不在

現場の声：「知財が重要なのは分かるが、何かから手をつければいいのか分からない」

⚠️ 潜在リスク：開発した技術へのタダ乗り（フリーライド）やライセンス収入の機会損失。

## 戦略の不在

現場の声：「言われるがまま1件出願してみたが、本当にこれで良かったのか不明」

⚠️ 潜在リスク：簡単に回避される特許構造。意味のないコスト支出。

## 調査の不在

現場の声：「忙しくて他社の特許を調べる時間もノウハウもない」

⚠️ 潜在リスク：突然の権利侵害警告状。無駄な開発費用の発生。

## 制度の不在

現場の声：「職務発明規定などの社内ルールがなく、担当者も不在」

⚠️ 潜在リスク：退職時の権利帰属トラブル。発明者のモチベーション低下。

# 知財部が担う「本来の4つのコアモジュール」

## Module 1: 発明発掘

現場のアイデアから特許化すべき価値ある原石を見つけ出す。



## Module 2: 出願戦略

「何を・どこまで・どの順で」出願するか、事業を守る計画を立てる。



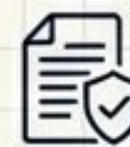
## Module 3: 特許調査

競合の動向を把握し、自社の開発方向性（羅針盤）を定める。



## Module 4: 制度整備

職務発明制度など、社内で知財を保護・運用するルールを定着させる。



これらは独立した作業ではなく、相互に連動して企業の競争力を駆動するエンジンです。

# なぜ自前で知財部を作れないのか？「4つの不足」による負のスパイラル



これは個人の能力不足ではなく、構造的な欠陥です。自前主義を捨てる必要があります。

### 第3の選択肢：「知財機能の外部保管」というアプローチ

自前で知財部を構築

従来の特許事務所へ丸投げ

知財機能の外部保管（提案）

固定費の重さ	✗ 非常に重い (人件費)	✓ 軽い (スポット)	✓ 軽い (必要な時だけ)
事業との連動性	✓ 高い	⚠ 低い (言われた通り書くだけ)	✓ 高い (伴走型)
社内ノウハウ蓄積	✓ 蓄積する	✗ 蓄積しない	✓ 徐々に蓄積する
導入スピード	✗ 遅い (採用難)	✓ 速い	✓ 速い

「外部保管」とは、単なる外注（丸投げ）ではなく、外部の専門家を「自社の知財部」として必要な機能だけカチッと組み込む伴走型の仕組みです。

# 必要なタイミングで、必要なモジュールだけを接続する

## 特許調査

競合の権利を事前に把握し、無駄な開発や侵害リスクを回避（羅針盤機能）。



企画・R&D

## 発明発掘

現場のエンジニアにヒアリングを実施し、埋もれている特許の種を抽出。



開発進行

## 制度整備

職務発明規定のアップデートと、社内フローの構築。



リリース直前



顧問契約のような継続的な固定費は不要。スポットでの介入により、予算リスクを最小化しながら相性を確認できます。

# 外部保管のパートナーに「企業知財部出身者」を選ぶべき理由

## 特許事務所出身

### 強み

確実な権利化、  
個別案件の最適化  
判断基準

「審査に通り、  
特許が取れるか？」

## 法律事務所出身

### 強み

訴訟、紛争解決、  
リスク回避  
判断基準

「係争になった際、  
勝てるか？」

## 企業知財部出身

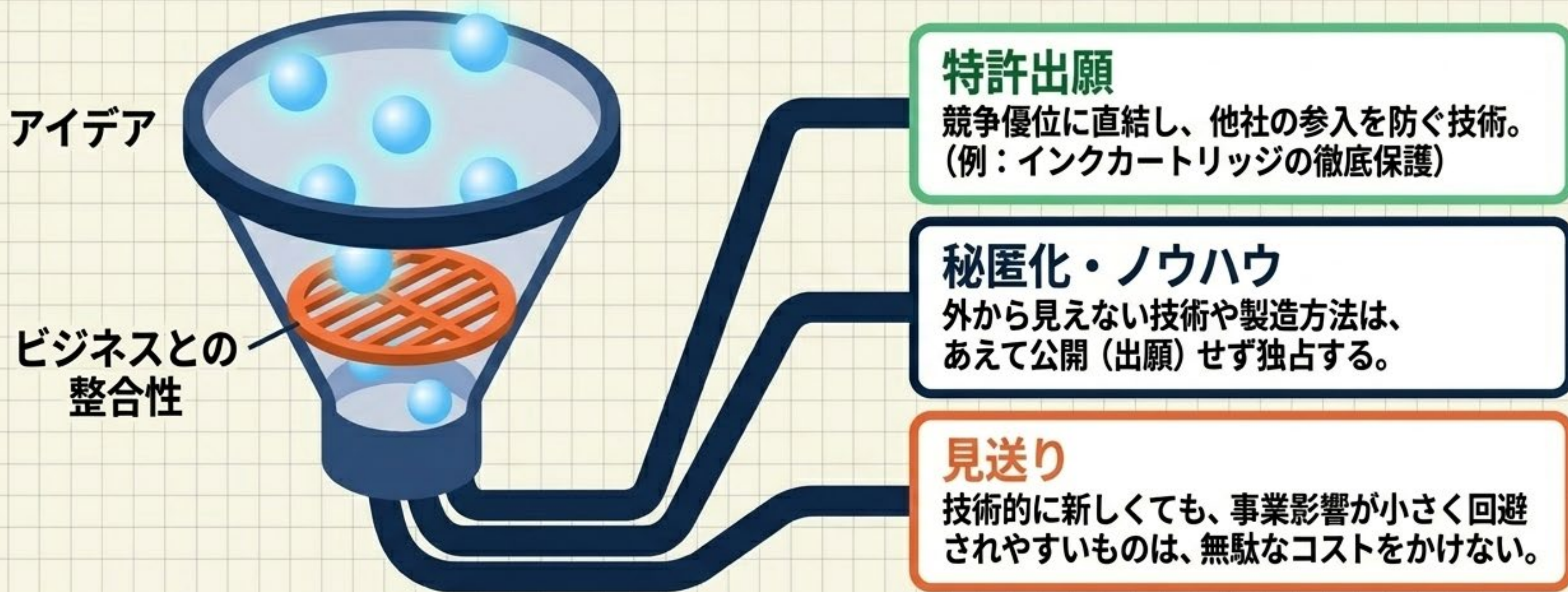
### 強み

事業戦略との整合性、  
全体最適、発明発掘  
判断基準

「その特許は、  
事業に利益を  
もたらすか？」

企業知財部出身者は、外部に依頼する「前」の工程（何を特許にすべきか、どうビジネスに活かすか）を日常的に行ってきた専門医です。

# 最大の価値は「やらない判断」をする力



知財リソースが限られる企業にとって、  
「何をやらないかを決める」ことは、出願することと同等以上に重要です。

# 負の連鎖から、正の循環へ (The Virtuous Cycle)

負のスパイラル



正のサイクル



専門家のスポット介入  
必要な時だけ外部知財部が機能。

目的を持った知財活動  
事業に直結する質の高い出願と調査。

社内ノウハウの蓄積  
伴走を通じて、徐々に社内に  
「判断基準」が溜まる。

最適な予算投下  
成果が見えるため、  
適切な知財投資が可能になる。

丸投げとは違い、外部保管を繰り返すことで、最終的には自社内に知財のDNAが根付きます。

# 小さな第一歩から、知財のエンジンを起動する

## Step 1: まずは「発明発掘」の スポット相談から

「特許のネタがない」のではなく  
「見つけ方を知らない」だけです。  
開発の背景や課題をヒアリングし、  
特許の原石を抽出します。



## Step 2: 競合特許の 初期調査

自社の立ち位置を  
把握し、侵害リスクを  
クリアにします。



## Step 3: スモールスタート での制度設計

実態に合わせたシン  
プルな職務発明規定  
を整備します。

知財に気づいた今が、エンジンを回し始める最高のタイミングです。  
まずは、自社の技術についてお話をお聞かせください。